若原家系図

村上源氏若原羽林（うりん）

定紋　五三桐　一

六二代
村上天皇
天慶九年（九四六年）
天暦・天徳
康保四年（九六七年）

天暦九年丁未年（九四七年）
始を羽林と改む
羽林とは近衛府の
唐名にて大納言
参議近衛中将
となる家柄

正一位
磨

正二位
親房北畠大納言
吉野朝廷桂石　神皇正統記取原抄を著わす
六二歳

従三位
顯家中納言
親房の子にて奥州に住し後醍醐天皇延元二年
（一三三七年）三月二二日安部野に討死時に
二一才

正三位
顯頼村上若狭頭

従三位
義顯村上修理辨

正四位上
義輝村上伯耆小弼

従五位下（でる）
義光村上彦四郎
吉野朝の忠臣元弘二年　護良親王に従い
賊徒から錦旗を奪還　翌年（一三三三）
吉野城陥るに際し親王に代って自殺
明治四一年従三位を賜る

正二位
黄通梅渓前宰相

正二位
雅永植松三位

正三位
圓長赤松播磨少弼
然るに後醍醐天皇の元応二庚申年（一三二〇）
始めて播磨国の沖と云う処に新所を結び住す
長男下官して武門と成り住す　同暦正月一五日
に後醍醐天皇に随従する　この時家名を改め
赤松氏の先祖たる定紋、裏紋、幕紋共に先代より
用う

定紋　左巴　朱円印
裏紋　鉾
幕紋　笹龍胆（ささくしどう）

具平親王
村上天皇第七皇子

道茂中院前大納言

従四位下
房忠六條左中将

従二位下
道福愛房前大納言

従五位
具廣十種侍従

正二位
通清梅渓前宰相
枝通朝臣久世左中将と成
世間に用うる者　両家と
覚え違いなり

圓長　長男

則村赤松二郎判官

同じく後醍醐天皇に仕う　然るに御若宮護良親王にも比叡にのぼり沙門となり賜う　則村は正平五年（一三五〇）七四才にて没す

後醍醐天皇の元弘元辛未年（一三三一年）二月一五日父則村半官子細有之　髪を剃り改名して赤松同心と号しけり

然るに大塔宮護良親王の令旨を給い三男則祐を御味方に仕う　義兵を挙げて播磨の苔縄の城を乗っ取り住する内　同暦十月摂州摩耶の城に移りかえ住するに　父・則村国道納まり安堵の御代となり、身族の者共改め　此度　家名　一流を分出さる　後代の為、此巻に迎出　氏神は山王権現を奉礼する者也

則村　長男

範資赤松三郎

御所一ノ宮高良親王に仕う

二男

貞範四郎

三男

則祐太郎

大塔宮に随従す

作用氏

頓宮氏

上月氏

小寺氏

飽間氏

右五名は赤松の流と覚ゆべし　然るに　此度　則祐に別腹有り　若狭の国に村上義廣と云う者　先代同姓より出　一流の縁有り　義廣の養子と成り家督を継ぐ　義廣　家に系図の写し有りし所に　家火災にあい系図焼失　此度先祖よりを写し取り家名共に改め國名をかたどり氏を初めて若原と改名す

村上義廣　長男

則次　若源右門頭

即ち若狭の遠敷の城を若原が城と云い　九七代後村上天皇の観応二辛卯年（一三五一）二月五日大将軍源朝臣尊氏郷の御幕下と成る

則次　長男

則行　若原市の頭

室は名和長年の娘なり

則勝　若原蔵人

室は佐竹数馬の娘なり

則行　長男

則為　若原左近

室は朝野一角の娘なり

則行　二男

則光　若原仙左衛門

室は嶋田豊後の娘なり

則行　三男

則信　同名隼人

則行　女

伊藤伊織室

然るに此度　主君大将軍源朝臣尊氏郷五四才にてご逝去になり弟則光仙左衛門は尊氏郷の御三男足利基氏郷に仕う　願を立て若狭國大飯郡原の城に引き郷士となる

則為　長男
則宗　若原重郎左衛門
室は土岐頼宗の娘なり
然るに其後、若狭の小浜に住しけるに濃州大守多田美濃守頼國郷の御末土岐美濃守頼忠郷より度々御使者を賜う故　応永四丁丑年（一三七八）九月御幕下に成り出仕う

則為　二男
則般　若原惣兵衛
饗場（あいば）備中守に仕う

則宗　長男
則周　五郎左衛門
室は永井伝左衛門の娘なり
土岐美濃守瀬継に仕う　この君御改名され成瀬郷と申す

則周　長男
則親　若原平四郎
室は不破小三郎の娘なり

則親　長男
則里　若原兵三右衛門
室は宮部重内の娘なり
濃州井之口の御城有り　佐藤伊賀二郎光宗に始めて仕う　この君後に御改名有り三郎左衛門尉殿と申す
家名も御改められ稲葉氏の元祖となられる

則里　長男
則沖　若原伊織
室は長井隼人の娘なり
某は濃州清水城主稲葉伊予守一鉄入道に仕える者なり

則沖　長男
則景　若原重太夫
室は斎藤新吾の娘なり
主君一鉄入道或る時本巣郡河渡の城主安藤伊賀守氏家同郡北方地下の城主安藤道足入道と井之口の御城にて少しの争い有り　遺恨つのり一鉄迎一陣を企て　清水城を退き給う（曽根城）家臣の上申を同國軽海の城に組長として武藤清蔵、江崎三郎、白木清平、河村喜右衛門、某の右五人を見付け役に付け城前浪人にて同國北奥村と云う所に郷士にて主君一鉄郷に仕える大隅大膳同太良左衛門としめし合て一陣始まる　敵も味方も入り乱れ我君の屈強の城中を打破る　味方の勢も一一騎討死す　安藤入道も近習者を具し西をさして落ち行くのを同所千代母渕（ちよぶげ）（北方仲町の裏にて長谷川堤に添という処にて村瀬大隅同太良左衛門出向き東西より取り巻き討ち取る

則親　二男
則盛　若原膳左衛門
室は土岐九郎左衛門の娘なり

則親　三男
則元　若原三藏
尾張井森の城主織田三四郎信秀郷に随従する

則親　四男
則理（みち）　若原隼人
濃州大葉城主土岐左京大夫頼芸郷に随従す　この君同國池尻の御城に御在城有り　るすいに付　前縁有って浪人し大野郡の内野方を開き居住す
長亨元丁未年（一四八七）八月十日居住す也
一説には加納悦右衛門の臣となり清水に住すとも云う

則理　長男
継秀　若原四郎三郎
室は大野一角の娘なり
濃州不破郡に浪人する　池田郡國枝家兼政に仕う　若狭国若原城に再勤致すべく頻す　特に若原関に出、品他贈物に依り改姓して若原清水に巣めり
又　或は刀工となり他姓を名乗りたるやも知れず

則景　長男
則隆　若原長左衛門
室は相羽助六の娘
一陣の後、第一〇六代正親町天皇の天正一一壬午年（一五八三）七月軽海村に退き城内の辺（今日の南屋敷一一一番地と云い伝う）に浪宿す　然して　一〇七代後陽成天皇の文禄二癸巳年（一五九三）一子を残し自分は土岐郡に退く　又一説（清水村の若原彦造元小学校長調べ）には一陣の後　天正十壬午年七月軽海城退出　一時大野郡長瀬に居住　それより不破郡青墓へ退いたとも云う　年七〇才　古墳は長瀬趣山寺（長山寺にあるか山内在）

則隆　長男
則直　若原千代蔵
室は家臣千石
大覚寺宮に仕える

則隆　二男
法觀
雅名五郎吉薙髪　然れども一旦京都大爭寺殿に出仕
家名改め京都にて死す　妙心寺内大応寺に住　石碑あり

則隆　女
ツル
信州松本城蔀（ひとけ）新之亟室

則理　二男
継友　若原浅右衛門
室は山本兵右衛門の娘なり
同國可児郡に居住す

則理　三男
友次　治郎左衛門
室は浅井新左衛門の娘なり
同國武儀郡大葉に居住す
後に清水に来り　一鉄公に仕う

則理　四男
安継　若原又右衛門
室は西弥市郎の娘なり
同國大野郡に居住　岐阜中納言秀信郷に仕う　天正甲戌年九月

安継　長男
安平　若原源蔵
室は近藤又治良の娘
同國本巣郡に居住

安平　長男
安光　若原安右衛門
室は山口城主の末石田伊織の娘
寛永一五戊寅年二月七日島原の陣に討死　法名　玄林院宗在居士
石碑　京都在寺町浄蓮寺

安光　長男
安春　若原加藤治
浪士にて濃州大野郡清水の辺に住す
清水の東北にある松山に現在同姓四軒あり　この末であろうか

安光　二男
安儀　膳五郎
安儀肥後國島原天草何某と一緒に出立を催す　父さえぎって止むれ共用いず故に勘当す　京都所司代板倉周防守重寛殿に仕え寛文二癸辰年に退き尾州黒田に住むと云う

元和三丁巳年（一六一六）十月　日
此書是迄にとどめ　末祖は別紙に印　信州松本城内
義時に譲る

裏　書

此度始めて家名若原氏の一流を分出す　然るに父
則村諸流相分ると云え共　某の長男の一流を出す
某迄系図を写取　赤松流と相改め　無違之裏書印
を加傳う者也

建武二乙亥年　則祐
二月　日

添　書

以上は我家の所次の　を保管されたる系図書
及び一般刊行図書によってまとめた物にて此の後は明治初
め迄何等頼るべき記録もなければ　専ら師匠寺なる揖斐郡
大野町下方淨勝寺保管の過去帳（五世住職より）を資料と
し伝説寺を参考として作成したるもの也
但し平右衛門以下は位牌による

揖斐郡大野町下方　若原　二三郎
仝　若原　太六
仝　若原　正典（煙草屋）
仝　若原　源治（子孫は東京に住む）
仝　若原　義男
仝　揖斐川町清水　若原　英市
（亡父彦造氏は元真桑小学校長）

釋恵空　喜三郎　延宝四辰年（一六七六）十月朔日　死

釋澄意　長左衛門　貞享五辰年（一六八八）七月七日　死
子とあり俗名不記

釋宗善　金次郎　寛延二巳年（一七四九）八五才にて死
金十郎の誤りやも

釋尼智　元文五庚申年（一七三六）八月一一日　死

釋受教　為蔵　安永一〇年即ち天明元年（一七八一）八月五日　死

釋了信　庄位新六　文化三丙寅年（一八〇六）九月一八日　死

釋諦誠　平三郎　弘化二乙巳年（一八四六）四月二五日　死

釋道心　平右衛門　天明七年（一八六〇）生
萬延元庚申年六月三〇日七三才
晩年家計最も疲弊すと云う
平右衛門妻しゅん

釋尼妙寿　しゅん　安政六未年（一八五九）十二月朔日　死

釋教専信士　平十郎　軽海村一二番戸
平右衛門三男　本巣郡真正町軽海城前一〇八五番地に分家後に城前一〇八一番地に移転一家を創設す（現在は京一二男哲夫の住居）　性覇気に富み一門の衰微を憂え無一物にて独立を志し時恰も村民茫漠裡に処してよく家名を挽回することに努む　人呼んで太閤さんと
明治一二年（一八七九）一月二五日　死　享年六三才　農業

釋尼妙讃信女　るな　文化一四年（一八一八）五月八日生
本巣郡下真桑平民高橋清左衛門三女
明治二八年（一八九五）六月五日　死　享年七〇才

平右衛門長男治平は新六、新十郎、誠一、正夫の祖
平右衛門二男平五郎は平六、平作、忠平（平六）、伊左衛門（桂衛門）、文一（作五郎）、勇平（平八）の祖

釋西州信士　宇吉（柳平）平十郎二男　嘉永六年（一八五三）一一月一五日生
明治九年四月相続　中々の知恵者で一五の頃から村の集まりに出席して小太閤と云われた
昭和四年（一九二九）九月二五日　死　享年七七才

釋尼教實信女　たい　嘉永六年（一八五三）一月一〇日生
大野郡屋井村高橋七右衛門二女
大正二年（一九一三）九月一八日死　享年六〇才

平十郎長男　治平は分家す　平太郎、春一、十四夫の祖

宇吉　長女
たき
明治七年（一八七四）二月一〇日生
明治二六年（一八九三）一〇月一八日本巣郡重里村一〇番戸名和吾市と結婚
吾市は名和昆虫所（岐阜公園内）創設者名和靖の娘婿梅吉（二代目昆虫所長）の実兄
夭死

宇吉　二女
宇吉　三女
さく　四女
明治一二年（一八七九）六月四日生
明治三一年（一八九八）七月五日本巣郡真桑村軽海二五番戸若原平太郎と結婚

宇吉　長男
釋善教
明治一九年（一八八六）一才にて夭死

宇吉　二男
種次郎
明治二〇年（一八八七）二月一五日生
正六位高等官四等　公立高等女学校長を勤め定年退官

可祢よ
明治二四年（一八九一）二月一八日生
本巣郡一色村随原一一番戸津屋基の長女
兵庫県芦屋市大原町五二番地に転住

宇吉　五女
はるを
明治二三年（一八九〇）一月一七日生
明治四三年（一九一〇）二月一〇日本巣郡彈正村政田一七三番戸三浦利市と結婚

宇吉　三男
釋芳順信士
準一　明治二七年七月五日生
昭和二三年（一九四八）本巣郡北方町字増屋町一七二二の一に居を移し四男儀一と同居　昭和四九年（一九七四）五月二二日急性心不全にて没す　八一才
少年の頃　怪我により片足切断　農耕はと幾の手で、北方に移ってからは籠を作り雑貨商を

釋尼妙宣信女
と幾　明治二九年（一八九六）二月一三日生
安八郡神戸町大字神戸四〇三番戸吉田兼吉長女
昭和五四年（一九七九）四月一九日死　享年八三才

準一　長男
常真院釋教順
京一　大正四年（一九一五）一月二三日生　公務員
平成八年（一九九六）四月三〇日　享年八二才
大正七年（一九一八）七月四日生
本巣郡巣南村十八条　林盛陰　長女

準一　二男
釋龍音　龍一
大正六年（一九一七）三月一日生　教員
平成二一年一月一四日死　享年九三才

釋清益　益子
大正八年（一九一九）一〇月二五日生
山県郡高富町高富一七〇番地　鷲見保承　長女
昭和一六年（一九四一）一二月三〇日結婚
平成二七年（二〇一五）一月一五日死　享年九七才

準一　長女
楽邦院釋尼妙恵
くにる　大正九年（一九二〇）二月七日生
岐阜市光明町一丁目一番地　加藤庸二と結婚
平成五年（一九九三）四月二一日死　享年七四才

準一　二女
なつる
大正一三年（一九二四）七月一四日生
本巣郡真桑村下真桑七四七番地の六白木参一と結婚

準一　三男
義一
準一　四男
儀一

昭和四年（一九二九）七月七日生　昭和六年二月二一日急性肺炎にて死す

みさ子

この系図は昭和三三年二月一七日若原種次郎七五才が記したもの
師匠寺なる淨勝寺過去帳、真桑役場の戸籍原本にて調査作成したものである

家紋

寺　師匠寺　淨勝寺　揖斐郡大野町下方
有縁寺　円長寺　本巣郡真正町軽海
墓　本巣郡北方町北方　二ヶ所　本巣郡真正町軽海　二ヶ所

昭和五一年一一月六日
若原儀一

京一　長男
一弘

京一　長女
喜代子

京一　二女
清子

京一　二男
英孝

龍一　長女
節子　昭和一八年（一九四三）　生
平成二七年（二〇一五）　死　享年七三才

龍一　長男
龍彦
恭子

龍一　二男
俊彦
きよみ

由佳利　昭和二九年（一九五四）　生
平成一二年（二〇〇〇）　死　享年四七才

龍一　三男
恭

儀一　長男
忍
ひろみ

儀一　長女
ゆみ

龍彦　長女
環

龍彦　長男
亨
麻衣子

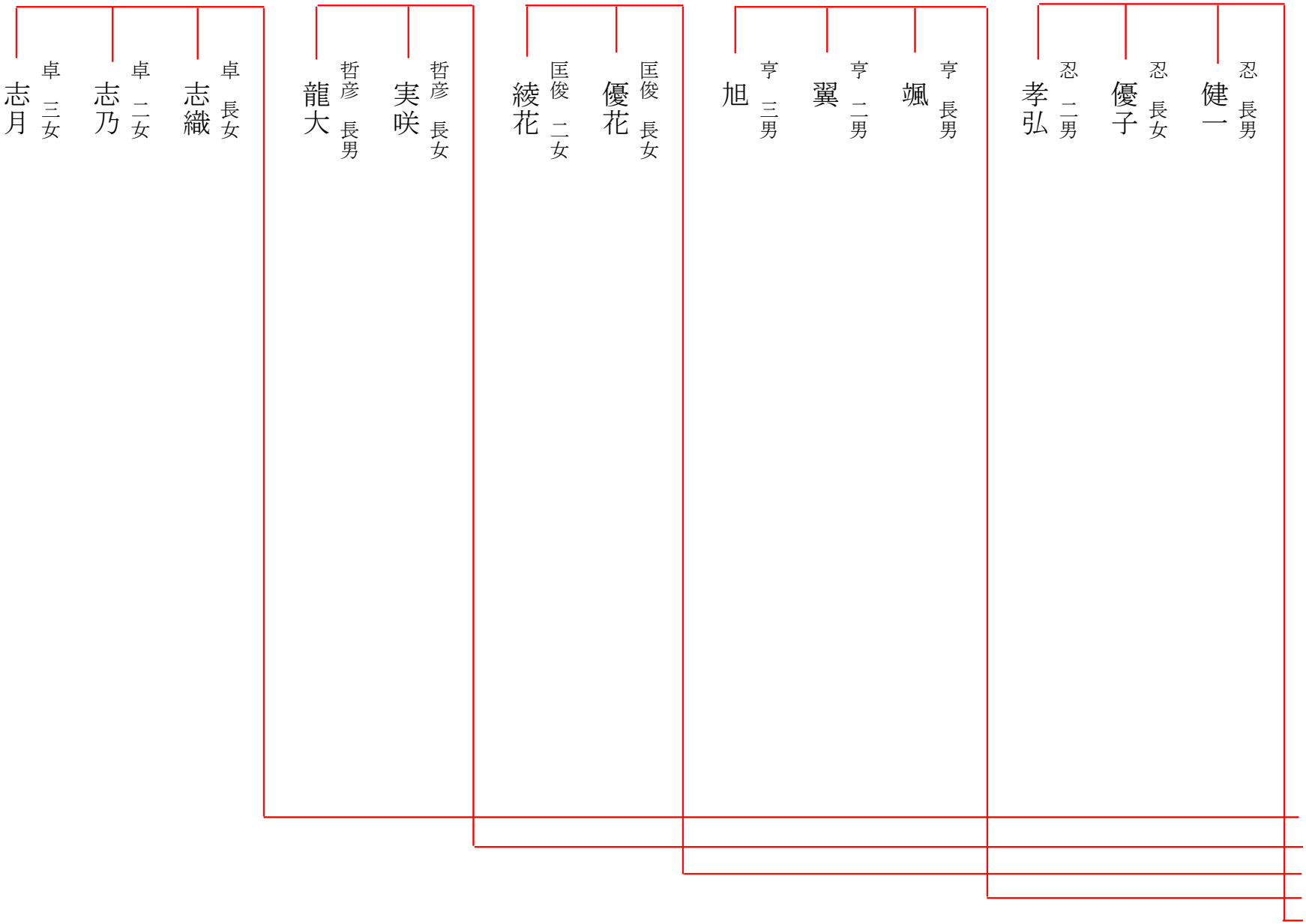
俊彦　長男
匡俊
亜希子

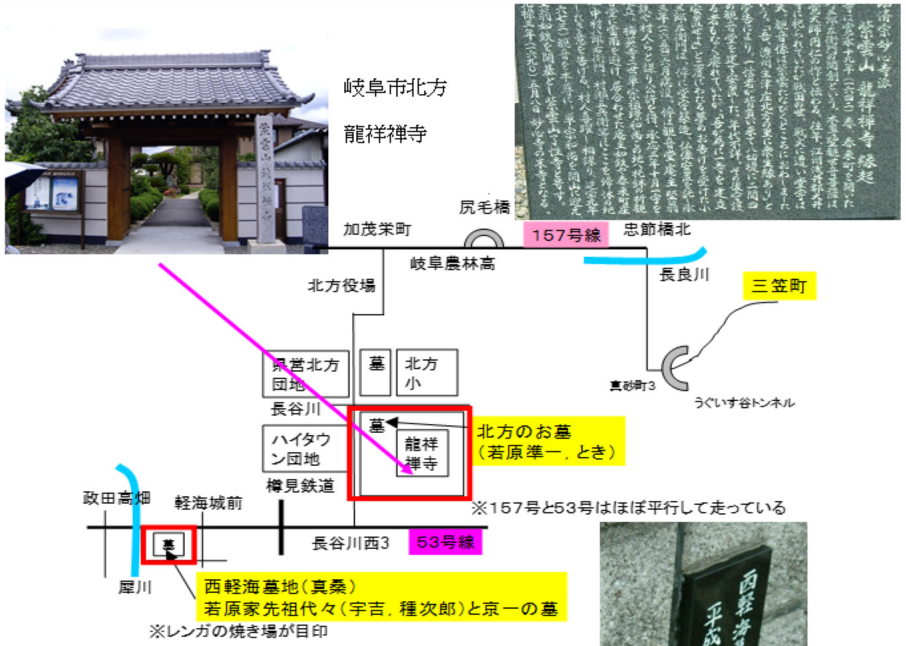
俊彦　二男
哲彦
奈緒子

卓
康　未典

恭　長女
加奈江

恭　二女
左知江


忍 長男
健一
忍 長女
優子
忍 二男
孝弘
亨 長男
颯
亨 二男
翼
亨 三男
旭
匡俊 長女
優花
匡俊 二女
綾花
哲彦 長女
実咲
哲彦 長男
龍大
卓 長女
志織
卓 二女
志乃
卓 三女
志月

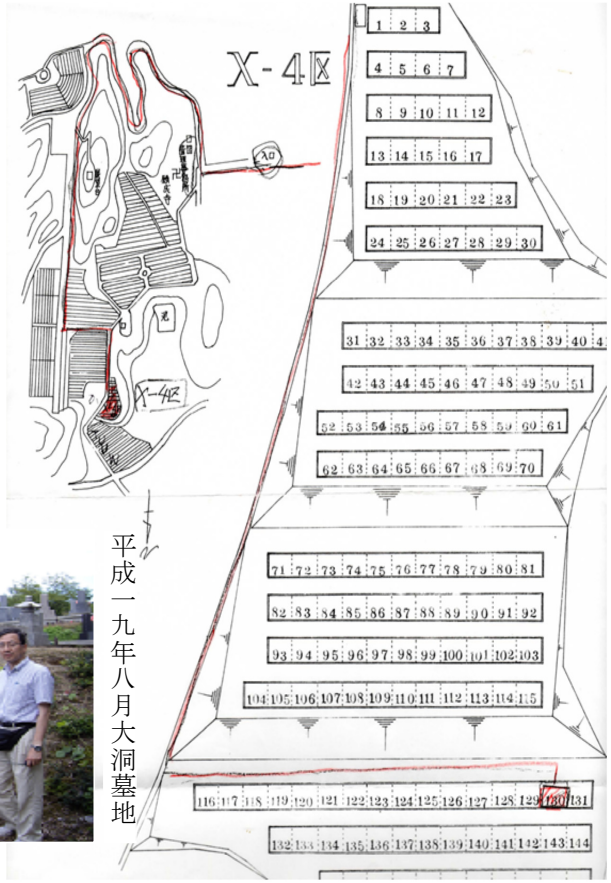


準一・ときの墓（龍祥禅寺）

若原先祖代々の墓（西軽海）

若原龍一・益子・由佳利の墓

平成一九年八月大洞墓地



岐阜市営大洞墓地
岐阜市大洞二丁目三二四番地（X四－一三〇）